③ 潤滑に借頼性がある

○ オイルの品質や混合比に対する心配は不要です。

2—3 オイルポンプの取扱い

オイルポンプは非常に精密高精度につくられていますので分解はしないで下さい。ポンプを取外した場合は、ほこり、ゴミ等の汚れに注意しエンジンに取付けた後エアー抜きを確実に行いセッティングを正しく合せる等取扱いを正しく行なってさえ戴ければ故障はありません。

1. エアー抜き

ポンプを取り外した場合、オイルパイプを外した場合、オイルタンクにオイルが無い場合（新車時）には、ポンプケース内に空気が入り、オイルの流れが不正確になりますのでエアー抜きを行います。

○ ポンプのブリーザーボルトを外してスタータープレート（手送り装置）を手前に回しポンプを作動してオイルを送ります。（この時プランジャーが最大ストロークする様にアジャストプーリーを手で押えて全作動状態に保ちます。）

ブリーザーボルトからオイルが流出しますが泡が出て来なくなればブリーザーボルトを締めます。（図2—3—1）

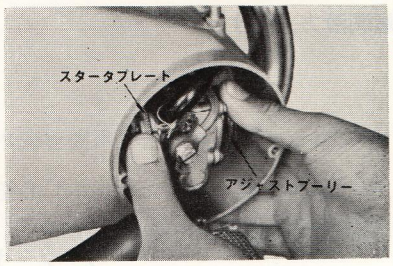

図2—3—1

○ ポンプを外した場合に多量のオイルを送る必要がありますのでセッティングを行なった後エンジンを始動し、アイドリング回転にて行なっても結構です。この場合もポンプワイヤーを引張ってプランジャーが最大ストロークする状態にします。（1～2分間要します）

※ デリバリーパイプ内のオイルの流れを良く観察して下さい。
白い空気の部分がなくなればエアー抜きは完了です。

2. セッティングの方法（キャブレターとポンプのセッティング）→ポンプの調整

① エンジンを始動し暖気運転後アイドリング調整（1100～1200rpm）を行う。

○ パイロットエアースクリュー戻し回数 1¾ 回転を確認する。

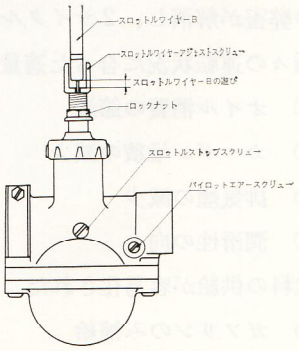

図2—3—2